

Title	乗っ取られた民主化運動--タイ1992年5月事件
Author(s)	玉田, 芳史
Citation	アジア・アフリカ地域研究 = Asian and African area studies (2001), 1: 155-185
Issue Date	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/79974
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

乗っ取られた民主化運動*

— タイ 1992年5月事件 —

玉田芳史**

Stealing a Democratic Movement: The May 1992 Incident in Thailand*

TAMADA Yoshifumi**

In May 1992, a Thai premier backed by the military was forced to resign after a bloody crackdown on a large anti-government rally. Scholars and political observers regard this incident as a crucial conjuncture in the democratization of Thai politics.

This essay argues that the Thai middle class stole the credit from Chamlong, who was — objectively speaking — the undisputed leader of the democratization movement. This political expropriation was possible for three reasons. First, the king's neutral stance during the conflict did not favor Chamlong so much. Second, there was an orchestrated effort to blame Chamlong for the bloodshed. This campaign of vilification even involved members of the "democratic forces."

Finally, success of the movement led to the mounting assertiveness of the middle class and the mass media that represented this class. Their boldness brought about the political reform that found its mark in the 1997 constitution. Yet, there also emerged a curious discourse during the struggle, wherein analysts assumed that the democratic movement was middle-class-dominated. These observers further took for granted that the middle class was inherently pro-democracy without providing evidence. Credit therefore had been overly focused on the middle class without any consideration of how the other classes figured in the movement.

This essay suggests that the middle class also had a conservative element in it. This conservative faction regarded Chamlong as "too radical" in the sense that he resorted to street protests and politics outside the parliament — both of which they then regarded as taboo in Thai politics. As a result, Chamlong, whose political star rose in May 1992, was unable to maintain his high profile and moral standing. He was eventually forced to retire from politics, and his failure became a bitter lesson for those who sought to emulate him by mobilizing the mass in street politics. His withdrawal also further empowered his conservative and liberal opponents.

* 本稿は平成11～12年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号11620080)による研究成果の一部である。

** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1. は じ め に

1992年5月、タイの首都バンコクでスチンダー首相の退陣を求める大規模な集会が何日間にもわたって開かれた。政府は5月18日未明軍隊を鎮圧に投入し、19日夜にかけて多数の死傷者を出す惨事となった。スチンダーは流血を招いた責任を問われて退陣し、政府を支えてきた軍隊も政治からの撤退を余儀なくされることになった。タイで「暴虐の5月 (phrutsapha thamin)」と呼ばれている事件である。

この事件がタイに民主政治を定着させる決定的な契機となったことに異論を唱えるものはまずいない。にもかかわらず、この事件については十分な研究が行われてきたとはいえない。なぜ大規模な集会が開かれたのか、なぜ5月であったのか、なぜ軍隊は発砲したのか。これらにはいずれも必然性はなかった。何らかの説明が必要である。さらに、事件が民主化にどのように寄与したのか、軍隊がどのようにして政治から撤退したのか、事件から数年後に政治改革運動が登場してくるのはなぜか、こうした疑問についても説得力のある説明がなされてこなかった。

事件に関する研究が貧困な主たる理由は、中間層 (chon chan klang) 主導説が風靡し、多くの研究者を思考停止状態においてきたことに求めよう。経済が成長すると中間層が拡大し結果として政治が民主化されるという近代化論の図式に見事すぎるほど合致する中間層主導説の呪縛からいったん自由になり、改めて事件を吟味する必要がある。軍隊をめぐる諸問題つまり軍隊がなぜ発砲したのか、どのように政治から撤退したのかといった問題は別稿に譲ることとして、本稿では次の2点について考察してみたい。1つは、大規模な集会が5月に開かれた理由である。大規模な集会がなければ、流血も政権交代もなかった。参加者の詮索よりも、集会の規模が膨れあがった理由をまず解明する必要がある。もう1つは、事件の渦中や直後にはチャムローンが中心人物であると、支持者、敵対者を問わず誰もが見なしていたにもかかわらず[たとえば, Prudhisan 1992: 126; Khien 1993: 67; Khien 1997: 33; Pasuk and Baker 1995: 359]、やがて中間層が主役に祭り上げられるに至った理由である。この乗っ取りがその後の民主化にどのような意味を持っていたのかについても触れたい。

2. 首相退陣要求集会

92年5月の集会は6日～11日、17日～20日の2回にわたって開催された。国会前で始められた集会は5月7日夜には御幸 (ratchadamnoen) 通り経由で王宮前広場 (sanam luang) へ移動した。8日夜には王宮前広場から出て再び御幸通りを逆行した。今度は途中のパーンファー橋で移動を阻止され、11日朝まで路上で集会が続けられた。これが第1ラウンドである。11日の解散の折には、17日に王宮前広場で集会を再開することが約束されていた。5月17日からの集

会は18日のチャムローンの逮捕を境目として様子が大きく変化したので2つの時期に分けうる。17日にも再び集会は王宮前広場を出て、パーンファー橋で阻止された。18日未明には軍隊の発砲が始まり、死傷者が出た。集会は御幸通りでそのまま続けられ、18日午後にはチャムローンが逮捕された。いったん解散させられた集会は同日夕方から再び始まり、5月19日朝にかけて軍隊の度重なる発砲で多数の死傷者を出した。抗議集会ならびに発砲は20日夜国王が収拾に乗り出して終わることになる。

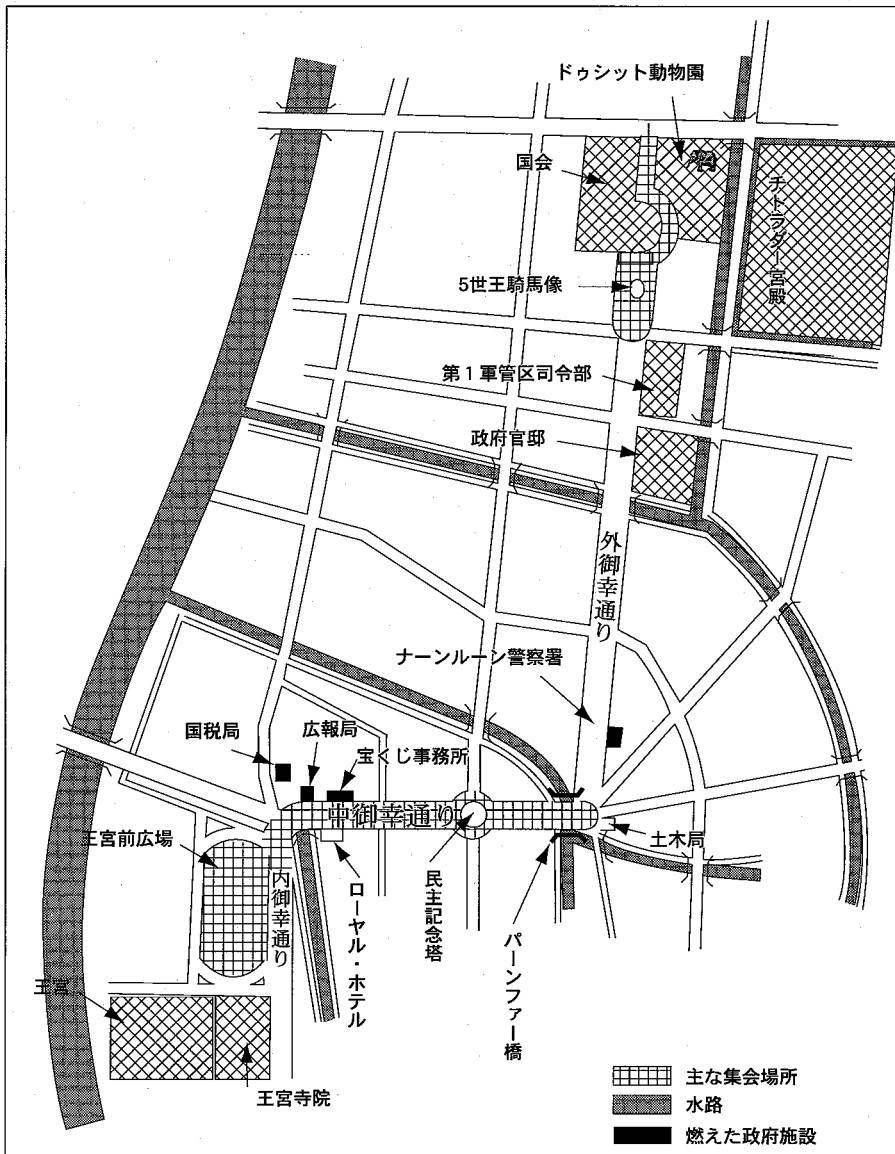


図1 バンコク略図

2.1 第1ラウンド

スチンダー政権の成立を巡ってはいろんな不満の種があった[たとえば, Khien 1997: 11-23; RT 1992: 4-6]。ひとことでいえば、軍の最高実力者スチンダーが91年クーデタで握った権力を総選挙後も温存したからである。クーデタは政界の浄化を口実とし、不正蓄財政治家の摘発に着手することで喝采を浴びた。しかし、クーデタ後起草が始まった新憲法草案では、下院議員¹⁾以外のものにも首相就任の道が開かれており、軍首脳が首相に就任するのではないかという疑念が強まった。それを裏付けるかのように、軍は政党工作を進めて親軍政党連合を作り上げていた。このため憲法草案への反対運動が盛り上がると、91年11月にスチンダーは首相に就任しないと明言した。しかしながら、92年3月に総選挙が実施されると、スチンダーは予め準備していた親軍政党連合の支持を受けて首相に就任し、しかも不正蓄財容疑で摘発した政治家も入閣させた。多くのものが不満を抱いて当然だったのである。

4月7日にスチンダーの首相就任が決まると、チャラート²⁾が翌日から抗議のハンストを始めた。4月17日に政権が発足すると、全国学生センター (sun nisit naksuksa haeng prathet thai, 以下ではSNNTと略す) や民主化運動委員会 (khanakammakan ronnarong prachathipatai, 以下ではKRPと略す) は抗議運動を展開し、野党とともに4月20日に5世王騎馬像広場で抗議集会を開いて5万人を集めた。しかし、首相はこうした批判に動じる素振りをまったく見せなかった。

政府の施政方針演説が行われる5月6日が迫った4日夜に野党パランタム党党首チャムローンがハンストを宣言し、国会前で座り込みを始めた。その際に遺言に相当する辞世の手紙を印刷して配布した。それには「生命をかけます。抗議運動が成功しなければ、7日以内に死にます」という衝撃的な見出しがついていた。本文では「7日ほどしか生きられないでしょう。私はスチンダー大將が辞任するまで、もしくは餓死するまで、断食を止めません」と述べ、死を避けるために「1日仕事を休んで5月6日午前8時に平和な集会に参加していただけるようお願いします。…国会前でお会いしましょう」と集会への参加を呼びかけた。「6日をすぎると、反対してももはや効果はほとんどありません」と主張し、駄目を押すかのように、「この場を借りてみなさんに…とりわけこれまでに私を支援してくださった方々にお別れの挨拶を述べさせていただきます」と結んでいた[玉田 1992: 376-377]。

5月6日は政府が朝からテレビでテロップを流して集会は交通渋滞を招くばかりか、暴動へ発展しかねないので参加を控えましょうと呼びかけていたにもかかわらず[Matichon, May 7,

1) 国会は2院制であり、上院が官選、下院が民選であった。上院議員には軍人や行政官が多かった。下院議員へのこだわりが生まれる理由はここにあった。

2) チャラートは1979年と86年に下院議員に当選したことのある政治家である。80年に石油政策に抗議して、83年に軍主導の憲法改正運動に抗議してハンストをしたことがある。

1992], 9時40分に首相の施政方針演説が始まった直後には2万人が集まり [Bangkok Post, May 7, 1992], 夕方以降には10万人を越えた。³⁾ これは1973年10月14日政変以来の稀有な規模であった。⁴⁾

こうして多数の人々が集まったにもかかわらず、首相は辞任しなかった。翌日10時に国会が再開された。国会内で野党の批判を浴び、国会外で集会の圧力を受けた首相は、正午前に国会で発言をした。それは首相就任理由として、① 憲法は民選議員以外のものの首相就任を禁止していない、② 共産主義体制の樹立をもくろむ某野党党首から体制を守るため、③ 邪教の支援を受ける某野党党首から仏教を守るため、④ 金権選挙で当選した下院議員の汚職を防止するため、という4点を述べたものであった。②はチャワリット（元陸軍総司令官で第2党の野党新希望党党首）、③はチャムローンを攻撃し、④は与野党の全下院議員を罵倒する内容であった。

これは首相からの宣戦布告に等しかった。5月7日午後にはテレビの共同番組を通じて集会批判を繰り返すようになった。15時をすぎると、集会に対する軍隊からの警告がたびたび放送され、さらに首相の国会演説も繰り返し放送されるようになった。夜に入ると、陸軍のテレビ局チャンネル5は、チャワリットとチャムローンを批判するクックリット元首相のインタビューを放送した [Matichon, May 8, 1992]。

首相側が対決姿勢を鮮明にする中、国会前のチャムローンは17時40分に「どんどん集まって欲しい」という主旨の手紙を代読させた [Naeona, May 8, 1992]。集会へ駆けつけるものは増える一方で、20時前には15万人へと膨れあがった。国会前には広場があるわけではなく、普通よりもやや広い歩道があるにすぎない。このため人々は国会前の道路や歩道ばかりではなく、周辺の道路や5世王騎馬像広場にも溢れかえった。チャムローンは20時に集会を王宮前広場へ移動することを決定し、チャムローン自身も20時半に自動車で移動を始めた。

チャムローンは21時10分に王宮前広場で、人数が少ないと警察が私を逮捕するかもしれないのでなるべく多くの方が私とともに夜を明かしてください、という手紙を代読させた [Matichon, May 8, 1992]。王宮前広場には演説用の舞台が設けられ、野党、SNNT、KRPの指導者や芸能人が演説を繰り返した。8日の6時を過ぎると集会の規模は小さくなった。この朝、チャムローンは決死の覚悟であることを再確認する2通目の遺言状を書き、大書したうえで掲示させた [Thai Rat, May 9, 1992]。参加者がさらに減ると、10時45分には、断食を断固として続けるという手紙を代読させた [Phucatkan, May 9, 1992]。

政府側は、6時45分からの軍のラジオ番組で、集会参加者には学生のほか、動員された大衆、

3) 日刊サヤームラットは18時には20万人 [Sayam Rat, May 7, 1992], 日刊マティションは16時半に8万人、18時半には15万人、21時には15万人 [Matichon, May 7, 1992], ひかえめな数字をあげる英字紙ネーションは最盛時に7から10万人 [The Nation, May 7, 1992] といった数字を報じている。

4) 73年10月政変との比較については末廣 [1993] を参照。

殺し屋、密林から出てきた人間のように粗末な身なりをしたものたち（共産ゲリラであることを仄めかしている）などであり、あまりにも雑多であるため統制が難しく、危険な事態へと至りかねないと批判した。10時半には仏教徒の代表を名乗る30名が首相を訪問し、国会での仏教擁護演説への謝辞を述べて花束を贈呈した [Matichon, May 9, 1992]。この様子はテレビで報道された。午後には、内務大臣が新聞社各社の代表を招いて集会報道の自制を要請した。また、内務省は国営企業職員の集会参加を禁止する通達を出した [Matichon, May 9, 1992]。15時45分には首相が、5月10日から16日は王宮前広場を会場として仏教週間行事が開催されることになっており、行事を妨げてはならないと警告した [Matichon, May 9, 1992]。首相は19時半にテレビで声明を発表し、首相就任理由を説明したうえで、集会は暴動へと発展しかねないと警告し、さらに個人的には首相を辞任しても構わないが、国会の少数派による国会外での抗議運動に屈するという悪しき先例を作ってしまうことになるので辞任はできないと言明した [Matichon, May 9, 1992]。

5月4日以後緊張が高まる中、5月6日と7日には多数の学者たちが国会解散を求める直訴を国王に行っていた [Matichon, May 7, 8, 1992]。7日に国王官房長官から問い合わせを受けた政党は与野党とも国会解散に反対の意志を表明した。下院議長は国会での事態打開を図るため、憲法改正に向けて政党間の意見調整を始めた [Matichon, May 8, 1992]。8日には9時半から与党5党が憲法改正について相談し、社会行動党党首は13時半からの記者会見で、与党が5項目について憲法を改正することに合意したと発表した [Matichon, May 9, 1992]。焦点は首相を下院議員に限定するかどうかであった。

首相の即時辞任に固執していたチャムローンは、8日夕方からの野党4党の代表者会談を受けて、態度を少し軟化させた。しかし、上述のように直後の19時半に首相は辞任しないことをテレビで明言した。この後、チャムローンは15万人を超える集会⁵⁾に向かって次のような見解を代読させた。「憲法改正に騙されてはならない。…戒厳令はしけないだろうし、クーデタもできないだろう。…しかし集会の規模が小さくなる時間帯を見計らって軍隊による集会解散を試みる可能性はある。今となっては危険を恐れてはならない。地方の人々も参加するようになっている。この週末には参加者がもっと増えるだろう。…5日連続で罵倒され続ければ、…居座れなくなるだろう」 [Matichon, May 9, 1992]。

21時前チャムローンは自動車に乗り、集会参加者を先導して王宮前広場を出た。デモ隊は御

5) 5月8日夜の集会の規模についてはさまざまな報道がある。英字紙ネーションは19時半に15万人であったとしている [The Nation, May 9, 1992]。これ以外に、20時前には50万人、20時15分には80万人 [Phucatkan, May 9-10, 1992]、20時に100万人 [Ban Muang, May 9, 1992]、夕方の16時に20万人 [Matichon, May 9, 1992]、17時20分に10万人 [Daily News, May 10, 1992]、18時半に5万人 [Thai Rat, May 9, 1992] と実にさまざまである。

幸通りを前夜とは反対方向へと向かった。しかし、パーンファー橋に到着すると、警察のバリケードに行く手を阻まれることになる。チャムローンは中央捜査警察司令官との交渉が不首尾に終わると、22時40分に集会参加者に向かって演説を行った。たとえ解散させられても、明日も明後日も集会を開く。市内の交通は大渋滞になるだろう。我々の選択肢は、ここにとどまって夜を明かすか、先へ進むかのいずれかしかない、という主旨であった [Matichon, May 9, 1992]。王宮前広場から民主記念塔付近へ演壇を移設すると、23時半に彼の手紙2通が代読された。1通は政府宛であり、「集会を解散させようとして全員を逮捕しても収容する場所がなく、…クーデタを実行してもじきに外国へ亡命しなければならない。…首相が辞任すれば済むことである」と書かれていた。もう1通は集会参加者宛であり、「明日には必ず勝利できる。…人々が御幸通りを占拠すれば、首都全域の交通が麻痺し、首相は居座れるはずがない」と述べられていた [Matichon, May 9, 1992]。いずれも参加者を鼓舞し、集会に引き続き参加するように呼びかける内容である。演壇はもう1カ所設置され、野党政治家、人気歌手、政治活動家らが一晩中入れ替わり立ち替わり演説を行って、集会参加者の関心を喚起し続けた。

実は、集会の移動はチャムローンの独断専行であった。彼にすぐに付き従ったのは集会の一部にすぎず、大半は王宮前広場に残ったままであった。パランタム党以外の野党3党は移動しないことを決め、SNNTのパリンヤー委員長とKRPのコートム副委員長は移動しないように呼びかけていた [Matichon, May 9, 1992]。23時8分にコートムは、KRP、SNNT、NGO⁶が集会の指導から手を引き、今後はパランタム党のみに委ねることにしたと演説し、その際にはパリンヤーとパランタム党議員が演壇上で口論になるという一幕もあった [Thai Rat, May 9, 1992]。残留を主張していたチャラートが23時20分に移動を発表すると、皆が移動に応じた [Matichon, May 9, 1992]。23時半頃には最後まで残っていた2万人ほども移動を始め [The Nation, May 9, 1992]、中御幸通りは群衆で埋め尽くされることになった。

こうした足並みの乱れを捉えて、政府側は早速5月9日の0時にテレビで、SNNTとKRPの離脱を賞賛するニュースを報道した [Matichon, May 9, 1992]。30分後のテレビニュースは、王宮前広場に残っていた人々はコートムの説得に応じて帰宅したものの、チャワリットとチャムローンがパーンファー橋付近に演壇を設置し、集会に結集するよう煽動していると非難した [Matichon, May 9, 1992]。1時には、王宮前広場の集会は0時30分に終わった、パーンファー橋で集会を続けているのは一部の学生だけである、という首都防衛部隊⁷の声明が報じられた

6) タイではNGOが人権、環境、開発、教育などに関わる組織ばかりでなく、KRPのような政治団体（非政府系非政党系のもの）、SNNTのような学生団体、教師や弁護士などの職業団体、あるいは労組も含めた広い意味で使われていることに注意しておく必要がある。

7) 1981年8月に第1軍管区司令部内に設置された。陸海空の3軍と警察から構成される。司令官は陸軍総司令官、陸軍部隊の司令官は第1軍管区司令官である。

[*Matichon*, May 9, 1992]. 集会が少数の急進派のみによって行われていると印象づけようとするこうした報道に対して、KRPとSNNTは0時50分と1時半に戦線離脱を否定する発表を行った [*Matichon*, May 9, 1992].

チャムローンは5月9日朝、断食を続行すべきか、食事をとって闘争を継続すべきかを集会参加者に問いかけた。断食中止に拍手の嵐が沸き起こった [*Matichon*, May 10, 1992]. 食事後休憩をとったチャムローンは10時30分にパラタム党幹部を集めて、党首辞任を明らかにした [*The Nation*, May 10, 1992]. 10時45分には民主記念塔の演壇で演説を行い、政府側から個人的な権力欲のための行動と批判されており、人々の集会参加意欲を削いでいるので、党首を辞任したことを明らかにした。続けて、集会に居残ろうと呼びかけたのに、朝になると帰宅するものが多く、参加者が少なくなって、政府側の軍勢に包囲され、隊列を整え直さなければならなかったことに落胆の意を表した [*Matichon*, May 10, 1992].⁸⁾

断食を中止した5月9日昼間のチャムローンは多忙であり、精力的であった。午前中に何度か演説を行ったほか、昼前から午後にかけて内外報道陣のインタビューに何度も答えている [*Matichon*, May 10, 1992]. 15時からの演説ではこう述べた。政府はパーンファー橋の兵力を増強している。武力によって集会が解散させられることがないように、集会にたくさん集まって欲しい。「断食をやめたからにはもう死にはしないとって、私を助けにやってくるのを止めないでください。国を民主化するために、もっとたくさんの人が助けにやってくるください」 [*Matichon*, May 10, 1992].

他方、政府側は集会を解散させようと画策をしていた。チャンネル5は10時8分にチャムローンのハnst中止を歓迎し、集会が終わったという印象を与えるニュースを報道した [*Matichon*, May 10, 1992]. 続いて10時23分には、チャムローンとチャワリットが個人的な権力欲のために集会をチトラダー宮殿（国王の居所）へ移動させることにより暴力沙汰へと発展させようとしたと辛辣に批判する声明を報道した [*Matichon*, May 10, 1992]. 10時35分には、軍隊が、チャムローンとチャワリットが騒乱を煽動しようとしていることは惨事を招くと批判した [*The Nation*, May 10, 1992]. 昼には、首相がインタビューでこう語った。昨夜警察が道路を封鎖したのは、集会参加者の中にチトラダー宮殿を取り囲んで国王陛下に直訴しようと煽動するものがいたからである。国王陛下に迷惑をかけるわけにはゆかないので、断じて認めることはできない [*Naeona*, May 10, 1992; *Thai Rat*, May 11, 1992; *Matichon*, May 10, 1992]. 参加者が増え始める夕刻の18時30分と18時45分に首都防衛部隊は声明を発表し、集会へ参加しないように呼びかけた [*Matichon*, May 10, 1992]. 21時半すぎには軍隊が、首相が憲法

8) 連日朝になると参加者が減ることに懸念を感じていたため、5月9日には午前中にチャラートを乗せた自動車が数時間をかけて市内をひと回りし、集会への参加を呼びかけていた [*Matichon*, May 10, 1992; *Daily News*, May 11, 1992]

改正に応じることにしたので集会を止めるようにという虚偽の声明を放送した [Matichon, May 10, 1992].

土曜日の9日の19時半には集会の規模は10万人ほどへ膨れあがっていた。⁹⁾ この日の午後2時間にわたって、下院議長は各党代表者を集めて憲法改正について相談していた。議長によると、改正を4点に絞ることで合意したものの、与党側は各党において細部を検討する必要がある、15日には各党の意見が出さうものと予想された [Matichon, May 10, 1992; Naeona, May 10, 1992; Daily News, May 11, 1992]. 議長は10日0時10分にテレビに登場し、与野党が憲法改正で原則的に合意したことを明らかにした [Thai Rat, May 11, 1992; Matichon, May 15, 1992]. こうした動きを受けて、9日21時から野党4党、KRP, SNNTの代表らが集会解散について協議した。しかし、解散には踏み切れず、¹⁰⁾ 10日も集会が続けられることになった。

5月14日には国王が御幸通りを通行予定のため、集会の解散あるいは移動は不可避であった。集会の指導者たちはチャムローンを変えて10日18時から会議を開いた。深夜を過ぎても結論が明らかにされず [Matichon, May 11, 1992], 11日4時15分になってやっと、チャムローンは演壇に登って集会の解散を伝え、憲法改正の成り行きを眺めつつ5月17日17時に再び王宮前広場に集まろうと呼びかけた [KTS, May 16-22, 1992]. 混乱を避けるため、帰宅者が増える月曜日の朝を待っていたのである。

2.2 第2ラウンド前半

5月17日の集会に向けて、14日に民主連盟 (samaphan prachathipatai) が結成された。チャムローンの他、スラムNGOのプラティープ、医療NGOに携わる医師のサンとウェーン、国営企業労組のソムサック、学生代表のパリンヤー、ハンスト中のチャラートの代理人としてその娘の計7名が委員となり、委員長はサンであった。

17日までの間に、政府側はさまざまな対応策を講じた。首相は13日に、都庁が17日の集会のために移動トイレ車を貸し出した場合には、都知事の解任あるいは都議会の解散もあり得ると示唆した [Bangkok Post, May 14, 1992]. 批判の声が強まると、内務大臣は14日に、都庁が移動トイレ車を貸し出しても構わないと発言した [The Nation, May 15, 1992]. しかしながら実際には、軍隊が不要にもかかわらず借り出すことがすでに決まっていた [The Nation,

9) 警察局犯罪取締部によると10万人、公安警察によると6～7万人であった [Matichon, May 10, 1992]. 23時に20万人以上 [Matichon, May 10, 1992], 最大時に50万人 [Naeona, May 10, 1992] といった新聞報道もある。

10) 解散の決定を参加者に伝えるために、「チャムローンとコートムが演壇にのぼった。ところが集会参加者には闘争貫徹まで解散しないという雰囲気がみなぎっていた。チャムローンはコートムに相談したところ、コートムはこう助言した。決定をはっきり伝えることはできないでしょう。参加者は血気盛んな様子なので、納得のゆく成果が達成されない限り、参加者は不満を感じるでしょう。暴力沙汰へと発展することが懸念されます。これをうけてチャムローンはもう一度相談しましょうと述べた」 [Naeona, May 10, 1992].

May 17, 1992; *Matichon*, May 17, 1992].¹¹⁾ 15日には軍は王宮前広場での仏教週間行事を5月20日まで延長することを画策した [*Matichon*, May 15, 1992]. 16日朝には労働局は労働組合に17日の集会に参加しないよう文書で要請した [*Matichon*, May 17, 1992]. 国営の2つの銀行（クルンタイ銀行と貯蓄銀行）では行内放送で集会に参加してはならないと14日から呼びかけていた [*Bangkok Post*, May 16, 1992]. 芸能人にも圧力をかけるため、国営ラジオは集会に参加した4名の歌手の歌を放送することを禁止した [*The Nation*, May 16, 1992].

5月15日には全国の多数の県で一斉に首相支持集会を開催した。県庁前が会場であり、県知事が参加者を出迎え、行政側が飲み物を準備していた。食事を提供したところもあった。与党議員や兵士が参加したところもある。多くは数千名規模であり、千名に満たない県もあった。いずれも内務省が地方行政の指揮命令系統を活用して動員したものであった [*Matichon*, May 15, 16, 17, 1992; *The Nation*, May 16, 1992].¹²⁾ 16日には、クックリット元首相が記者会見で、首相への支持を表明し、同時に自分が王宮前広場で演説をすれば10万人を集めることができると豪語した [*Matichon*, May 17, 1992].

17日当日の夕刻には王宮前広場の集会に対抗すべく、バンコク市内の2カ所（陸軍運動場とウォンウィエン・ヤイ¹³⁾）で干ばつ救済義捐と銘打って無料コンサートを入念な事前広報活動のうでで実施した。陸軍運動場ではバンコク近県からバスを仕立ててやってきたものが多かった。彼らは村長に動員されてやってきたのである。観客は中高年を中心に1万人余りであった [*Daily News*, May 18, 1992; *Thai Rat*, May 18, 1992].¹⁴⁾ ウォンウィエン・ヤイには数千名が集まった。こちらは若者が中心であった。このコンサートは政府広報局のチャンネル11で全国に生放送もされた [*Matichon*, May 18, 1992; *Khao Sot*, May 18, 1992; *Thai Rat*, May 18, 1992; *Daily Mirror*, May 18, 1992]. いずれも義捐金を集めるためと謳っていたものの、募金のごくわずかであった。

他方、集会解散の一因となった憲法改正をめぐる動きは暗礁に乗り上げつつあった。5月11日に与党5党は憲法改正について会議を開き、各党での検討結果を18日に持ち寄ることになった。13日には各党で話し合いが行われ、慎重論が優勢を占めた。14日に国会議長（上院議長）は、与党案の提出を18日まで待ち、22日から国会審議を始める、と語った [*Matichon*, May 16, 1992]. 17日に与党チャートタイ党幹事長は、党の検討委員会の作業は22日には間に合わないもので、22日には野党案のみ審議することになるだろうと語り、同時に政治は国会外ではなく国

11) 軍隊が借り出した名目は、5月17日に陸軍運動場で開催予定のコンサートに備えるためであった。しかしながら、運動場にはトイレ設備が完備されており、トイレ車を借用する必要性はまったくなかった。

12) 5月15日には政府閣僚に近い労働指導者に率いられる労働者代表35名が首相を訪問し激励した [*Matichon*, May 16, 1992].

13) トンブリー側のタークシン王の銅像があるロータリー広場のこと。

14) ただし、閣僚所有のある新聞は5万人と誇大に報じている [*Daily Mirror*, May 18, 1992].

会内で行うべきだと批判した [Thai Rat, May 18, 1992]. 与党側の主張によれば、5月9日の下院議長発表は勇み足であり、憲法改正にまだ合意したわけではないことを国王に報告済みであった。

5月17日の王宮前広場には三々五々人が集まり始め、16時に演説が始まったときには2～3万人になっていた [Matichon, May 18, 1992; Phucatkan, May 18, 1992; Dao Sayam, May 18, 1992]. 警察の推計では、17時45分に5万人、18時半には8万人に達し [Khao Sot, May 18, 1992], その後もどんどん増えた。20時には広場の真ん中にある通路を越えて広がり、20万人以上になった。¹⁵⁾

他方、主催者側の民主連盟は17時から会議を開き、18時半には主立った指導者たちがみな舞台裏に集まっていた。音楽の演奏、劇の上演のほか、演説も行われたものの、20時になっても、民主連盟の主要メンバーは誰一人として演説を行っていなかった [Sayam Rat, May 18, 1992]. 広場北側に設置された舞台からの声が行き届かず、帰宅するものが出るのを阻止するため、20時すぎには南東側の法務省前にも小さな演台が設置された [Phucatkan, May 18, 1992; Matichon, May 18, 1992]. 21時になるとやっと、民主連盟の委員たちが主舞台に登った。口火を切ったのはチャムローンであり、続いてウェーン委員が集会を政府官邸前に移動すると発表した。まず北側のものが出発し、続いて南側のものがチャムローンに先導されて出発した [Thai Rat, May 18, 1992; Phucatkan, May 18, 1992; Naeona, May 18, 1992].

先頭集団は21時40分頃にはパーンファー橋に到着した。警察はすでに鉄条網でバリケードを築いていた。8日とまったく同じ事態の再現である。しかしながら、今回は警察との衝突が生じた。突破を図ろうとするものに、警察は消防車による放水で対抗した。放水を受けたものは石、瓶、木片などを警察官に投げつけ始めた。22時5分チャムローンが先頭集団に追いつき、パーンファー橋手前で静かに座っているよう何度も呼びかけたが効果がなかった。橋の向こう側でも警察との衝突が起き、火炎瓶を投げつけるものもいた。警察は警棒で群衆を殴りつけ、駐車してあったバイクや自動車を次々と破壊していた。0時頃には近所の消防署を一部のが占拠し、消防車などを破壊した [Naeona, May 18, 1992]. 0時にチャムローンは、火炎瓶を投げたり自動車に放火したりしているのは、政府が混乱を引き起こすために雇った連中であり、そうした連中を信じてはならないと演説し、同時に警察と群衆の間に決死隊を入れて、衝突を防ごうとした [Thai Rat, May 18, 1992].

政府はこうした破壊行為や暴力行為を理由として18日0時30分に首都圏に非常事態を宣言

15) マティションは20時の規模を15万人とも20万人とも報じ [Matichon, May 18, 1992], タイラットは25万人以上としている [Thai Rat, May 18, 1992]. 19時や19時半には30万人を超えていたという報道もある [Phucatkan, May 18, 1992; Daily News, May 18, 1992]. プーチャットカーンは20時10分には50万人に達していたとする [Phucatkan, May 18, 1992].

した。0時35分頃には一部のものがパーンファー橋のバリケードを突破して外御幸通りへ乱入し、警察車両を破壊した [Naeona, May 18, 1992; Thai Rat, May 18, 1992; Matichon, May 18, 1992].¹⁶⁾ 内務省は1時半に10名以上の集会を禁止する命令を出し、さらに1時35分には安全や秩序を脅かす出版活動を禁止する命令を出した [Matichon, May 18, 1992].¹⁷⁾ 1時45分には首都防衛部隊が集会を早急に解散しないと武力によって鎮圧すると警告した [Naeona, May 18, 1992]. 外御幸通りに入った数百名は児童青少年福祉警察司令部とナーンルーン警察署に侵入し、器物を損壊したうえ、2時すぎには建物に放火した。3時にテレビは、暴動鎮静化の気配が見られないので軍隊を投入するという首都防衛部隊の警告を放送し [Naeona, May 19, 1992], 3時15分と3時20分にも破壊活動について報道した [Naeona, May 19, 1992; The Nation, May 19, 1992; Thai Rat, May 19, 1992]. 3時半にはM16ライフル等で重武装した軍隊が外御幸通りで前進を始め、ナーンルーン警察署付近で突然発砲し、死者を出した。これを取材していた新聞記者はカメラを没収された [Thai Rat, May 19, 1992]. 直後にテレビは軍隊を投入すると再び警告した [Thai Rat, May 19, 1992; Naeona, May 19, 1992; Daily News, May 19, 1992]. 4時すぎに軍隊は威嚇射撃をしながら、外御幸通りの群衆をパーンファー橋へ押し戻す作戦に着手した。この折に多数の死傷者が出た [Thai Rat, May 19, 1992]. 「誰が人間を撃てと聞いた。威嚇射撃をするように命じたはずだ」という現場の将校の発言に示されるように [The Nation, May 19, 1992], 逃げようとする集会参加者に背後から発砲した兵士がいたためである。4時50分頃テレビの共同ニュースは暴動を鎮圧したと発表した [KT, May 19, 1992]. しかし、この後も断続的に掃討作戦が実施されており、5時半すぎには警告の後パーンファー橋で放水を交えながら20分間にわたる威嚇射撃が行われた [KT, May 19, 1992]. テレビは5時45分に軍隊投入の経緯を説明し [KT, May 19, 1992], 6時には血を流すことなく鎮圧したと報道した [Naeona, May 19, 1992].¹⁸⁾ この時刻には掃討作戦も中止され、小康状態を迎えた。

首相は5月18日10時から緊急閣議を開いて非常事態を宣言した理由を閣僚に説明した。首相はこの後第1管区司令部に向かい、14時からテレビで声明を発表した。「チャムローンは…政治的野望実現のために何度も集会を開き、集会参加者に暴力を煽動する行為をした。…8日にすでに1度移動を阻止されていたのであるから、集会指導者は政府指導者が御幸通りの移動を認めないことを承知していたはずである。これはチャムローン少将が暴力沙汰の発生を願っていたことを示している。[破壊行為が繰り返されたので] 非常事態を宣言しなければならなく

16) 1時15分にはパーンファー橋付近で銃声が100発ほど鳴り響き、死者3名、負傷者数十名が出たと報じる新聞もある [Naeona, May 18, 1992].

17) この命令を受けて、英字紙バンコク・ポストは18日の朝刊を2面の上半分（下半分は広告）、3面のほぼ半分（4分の1は広告）、4面も3分の1ほどを白抜きにして印刷し発行した。

18) 6時に第1師団長がやってきて交渉を申し入れ、王宮前広場へ戻るよう要請した。集会主催者は結論を出すことができず、そのまま御幸通りでの集会を続けることになった [Naeona, May 19, 1992; Thai Rat, May 19, 1992].

なったのである」[Phucatkan, May 19, 1992; Matichon, May 19, 1992]. 14時半ころから軍隊は兵力を増強し、15時にはパーンファー橋と民主記念塔の両側から威嚇射撃をしながら集会包囲網を狭め、ついにチャムローンを逮捕した。その後最後まで残っていた700名ほども逮捕して臨時留置場となった警察学校へ護送した[Matichon, May 19, 1992].¹⁹⁾ 掃討作戦を完了すると、政府は警備の部隊を首都駐屯の部隊から首都近傍の部隊に交代させた[Thai Rat, May 20, 1992]. 16時にテレビは血を流すことなく集会を解散させたと報道した。しかし、この掃討作戦でも何名もの死傷者を出していた[KT, May 19, 1992].

2.3 第2ラウンド後半

集会はいったん解散させられたものの、18日夕方になると王宮前広場からパーンファー橋にかけての地域にいくつもの小規模集会が登場し、軍隊が威嚇射撃を繰り返した。もっとも人数が多かったのは広報局や宝くじ事務所の前であった。そこでは集会参加者は軍隊とにらみ合い、軍隊に接近しては発砲を受け後退するということを繰り返し、多数の死傷者が出た。また、一部のものは宝くじ事務所と広報局の建物に侵入して器物を損壊したうえ、放火した。さらに国税局にも放火した。大事には至らなかったものの、石油やガスの輸送車を奪ってきて火をつけるものもいた。軍隊は19日5時から御幸通りでの本格的な掃討作戦に着手し、野戦病院と化していたローヤル・ホテルにいたものや、逃げ遅れたものを逮捕した[Daily News, May 20, 1992; Matichon, May 20, 1992]. 6時15分のテレビニュースは、御幸通りの暴動を鎮圧し暴徒700名ほどを逮捕したと報じた[Thai Rat, May 20, 1992].

御幸通りとは別に、18日22時頃から首都市内をバイク集団が暴れ回っていた。²⁰⁾ バイク集団は主に交通信号機や警察官詰め所を次々と破壊していた。鉄道中央駅を襲撃したり、路線バスや石油輸送車を奪ったりするものもいた。彼らは移動しながら破壊行為を繰り返しており、神出鬼没であった。警察はバイク集団の取締に追われるようになり、政府の関心も御幸通りよりもバイク集団に向けられるようになっていった。

首都防衛部隊は19日の3時55分から7時半にかけて4つの声明を相次いでテレビで発表し、次のように、手荒な鎮圧行動を共産主義者の陰謀のせいであると説明しようとした。昨夜から新たな首謀者が登場して集会の様子が一変した。共産ゲリラが集会に紛れ込んで暴力を煽動した。さらにバイク集団を使って何台もの「石油輸送車を奪取し、首都を火の海にしようとした」これは「暴力志向イデオロギーに基づいて」「騒乱状態を拡大させ」、それに乗じて「国家権力を奪取しようとする」陰謀である[Thai Rat, May 20, 1992; Matichon, May 20, 1992]. チャンネル5は逮捕したバイク集団の2名を9時半にテレビに出演させ、新希望党幹部を連想させ

19) 17時15分に警察学校に到着した逮捕者は男性594名、女性119名であった[Matichon, May 19, 1992].

20) 内務省によれば、バイクの数は800～1000台であった[Mahatthai n. d.: 7].

る人物が雇い主であると語らせた [Matichon, May 20, 1992]. 首相も 14 時 45 分にテレビで同じ筋書きに沿って、共産主義かぶれの野党党首による共産主義革命を阻止するために鎮圧に武力を投入せざるをえなかった、と発表した [Matichon, May 20, 1992].

19 日朝からは小規模な集会在市内各地で開かれていた。とりわけ夕方以降は首都郊外のラームカムヘーン大学で 3 万人規模の集会が開かれた。20 日になっても同大学での集会は続き、さらに御幸通りでも再び集会が開かれるようになった。それに加えて、チェンマイ、ソンクラ、コーンケンといった大学所在地を中心とした地方での政府批判集会も、首都での鎮圧への激しい怒りをバネとして勢いを増していた。しかしながら、しょせん蟻と象の戦いであり、無力感が漂っていた。銃口に対抗しうるのは、国王しかないと思われた。²¹⁾ 18 日以後は、過剰な武力行使で死傷者を増やす一方の首相に対する国王による仕置きへの切望が募るばかりであった。その国王は 20 日夜になってやっと収拾に乗り出すことになる。

3. 善悪の対立

3.1 チャムローン

チャムローンは陸軍士官学校を 1960 年に卒業した陸士 7 期生である。80 年にプルーム政権発足とともに首相書記官に抜擢された。85 年にバンコク都知事の公選制が復活すると、退役して無所属で当選を果たし、その後パラタム党を結成した。彼はサンティ・アソークという新興仏教宗派の信者であり、1 日 1 食しかも菜食という食生活に示されるように俗人としては異例に厳しく戒律を遵守していた。都知事在任中は清廉潔白さと行動力を高く評価されていた。このため、90 年には都知事選で 64% の得票を得て再選されたほか、都議会の 56 議席中 50 議席、区議会の 220 議席中 184 議席を獲得するという圧勝をおさめた。92 年 3 月の総選挙では知事を辞して自ら立候補し、首都で 35 議席中 32 議席を獲得するという圧倒的支持を得た [McCargo 1997]。彼は首都で着実に支持基盤を拡大し、絶大な人気を博していたのである。

その彼が呼びかけることで大規模な集会が始まった。彼が動員力を発揮した理由はいくつかある。① 都知事 2 期の実績、清貧ぶり、禁欲などのゆえに抜群の人気や知名度を誇っていた。しかしそれだけでは不十分と判断したため、② 厳格なハンストに突入し、③ 遺言状仕立ての声明文を発表して集会に人が集まらなければ死んでしまうという脅迫紛いの手段を講じた。チャムローン自身がこの点について、5 月 9 日ハンスト中止後の 10 時 45 分に、首相を退陣に追い込むには「多数の人々が必要だ。安逸に暮らしながら、人々に呼びかけても集会にはやってこない。だから、集会にやってこなければ、自分は死んでしまうという危険な方法を用いなけ

21) もう 1 つは銃口である。このため、20 日には軍内部の反主流派が人々を救うべく政府側軍勢と戦闘をしているという噂が激しく飛び交うようになった。

ればならなかった」と認めている [Matichon, May 10, 1992]。彼ほどの著名人でも人々を集会に集めるのは容易ではないことを物語っている。

5月6日から11日にかけての第1次集会ではチャムローンは野党、KRP, SNNT, NGOなどの支援を受けていた。一種の共闘態勢であった。そこにおける彼の役割について、彼自身が5月9日朝ハンスト中止直前に、これまでの集会を1人で指導してきたのかという記者の質問に筆談でこう答えている。「そうです。指導は全面的に私のもとにありました。というのも、①5月7日の国会前は混雑をきわめ立錫の余地もないほどでした。私は耐えられなくなって、委員に移動を提案しました。委員は決めかねました。コートム先生は…こうはできない、ああはできないという調子でした。私は委員が移動しなくてもかまいません、私が人々を導きます、という最後通牒を突きつけなければなりません。それから実に簡単に移動することができました。…②こうした大きな仕事をするには、気力や経験が必要です。見渡してみると、私は誰よりも適任でした。③集会に集まってくるのは、私を愛しているから、私を哀れむからです。私が話せば、人々は信じます。誰かを導こうとすれば、指導者としての信頼を得なければなりません。④結果からすると、私は正しい指導をしてきました。昨夜(5月8日)には同じことを繰り返しました。私は人々を率いて王宮前広場を出ました。委員の多くは反対しました。人々はほぼ全員が私に従いました。…⑤3, 4日前に、政治に関心を抱く人が私にいいました。もし委員会に指導を任せたら、まず成功しない。なぜなら、彼らは精神力があまり強くはなく、人々に知られておらず、経験もないからだ」 [Matichon, May 10, 1992]。人々を集めて指導しているのは彼自身に他ならないという傲慢なまでの自負心があふれ出ている。

5月17日の集会に向けて、14日に民主連盟を結成し、チャムローンを含む7名の委員を選出した。第1ラウンドでは裏方にとどまっていた人物を表に出して、参加者を増やそうという作戦であった。ただし、委員から政党とKRPの代表が抜け落ちていることに注意しなければならない。チャムローン自身の説明によれば、党内調整に手間取る政党は迅速な決定を必要とする連盟には不向きなので、KRP代表のコートムは大学の授業などに忙しく連盟の活動に専心できないので、²²⁾ それぞれ委員から抜け落ちたのであった [Matichon, May 15, 1992]。この結果、委員は彼と個人的に親しい人物や指導力の乏しい人物ばかりとなり、第2ラウンドでも彼は「総大将」 [Thai Rat, May 18, 1992] であった。²³⁾

22) コートムはチュラーロンコーン大学の教員であった。

23) 指導的な役割をチャムローンではなくNGOに認めようとする見解がある [Callahan 1998: 97; Callahan 2000: 96-98; Suthy 1995; Amara 1995; Prudhisana and Maneerat 1997; 河森 1997: 157-170]。NGOが集会の主催者側に加わっていたのは事実ながら、NGO独自の動員力はせいぜい92年4月の規模にとどまっており、首相を震撼させるにはまったく足りなかった。

3.2 スチンダー

チャムローンを助けたのは野党、KRP, SNNT, NGOのみではない。彼は5月16日に、政府が集会を妨害してきたことが反対運動を激化させてきたのではないかという質問に対して、「その通りです。政府はずっと助けてくれています」[Matichon, May 17, 1992]と答えている。集会を躍起になって妨害しようとする政府の方策はほとんどが逆効果になった。政府に対する不信感や不満を高じさせ、集会への参加者を増やすばかりであった。

そうした失策の最たるものは、テレビとラジオへの厳しい報道管制であった。政府は5月7日午後以降放送メディアへの規制を強めた。テレビは陸軍直営のチャンネル5が中心となって、5局全局が共同ニュースを流すようになった。この時期には集会に関する報道はほとんど行われず、わずかに行われるときにはいつも歪曲されていた。暴徒、暴力、煽動といった言葉を用いたり、集会は終わった、参加者は少数の急進派だけである、集会は共産主義への利敵行為になる、集会は王室への冒瀆行為であると報じたりすることで、懸命に集会への参加に歯止めをかけようとしていた。5月9日の例をみると、KRPとSNNTが集会から離脱したと0時から繰り返し放送した。午前中には、チャムローンのハンスト中止と党首辞任を説明抜きで報道した。彼が敗北し、集会が終わったと視聴者に印象づける報道であった。夜には、翌10日はシリントーン王女の通行が予定されているので邪魔をしてはならないと警告した[Naeona, May 12, 1992]。

政府側の報道管制は放送メディア²⁴⁾にしか及ばなかった。このため、活字メディア²⁵⁾は集会の様子を連日詳細に報道した。それゆえ、政府が事実を歪曲した放送を強いていることは明らかであった。たとえば、テレビは5月10日に集会が妨害しているため、王女の通行ルートの変更を余儀なくされたと繰り返し報道した。しかし、11日の新聞は前日御幸通りで多数のものが整然と王女を待ち受ける様子を一面に写真入りで報道し、政府発表の虚偽を白日のもとに晒していた[Matichon, May 11, 1992; The Nation, May 11, 1992]。放送メディアは日増しに信用を失っていった。それゆえ、20日午後に首相が死者は40名と発表しても、信じるものはほとんどいなかった。ある野党政治家は5月10日2時に集会で、「今回の集会について真相の報道を行わず、こぞって人々に嘘をつく政府のマス・メディアに感謝したい」と演説した[Daily News, May 11, 1992]。政府側が一方的な報道を続ければ続けるほど、怒りややじ馬根性から集会へ参加するものを増やすことになったのである。

5月8日以後情報に飢える人々は競うようにして新聞や雑誌を購入していた。新聞売店では、

24) 首都にはキーステーションとなる地上波のテレビが5局あった。陸軍所有が2局(チャンネル5, 7)、放送公社2局(チャンネル3, 9)、広報局1局(チャンネル11)である。陸軍と公社は1局ずつ(チャンネル3, 7)を民間に貸し出していた。陸軍直営のチャンネル5は政府と軍の立場をもっとも強く代弁していた。

25) 一般紙には政府系のものは存在しない。ただし、一部の日刊紙は政党幹部が所有者となっていた。

政府に批判的な紙、集会報道の多い紙から先に売り切れ、売れ行きの悪い与党系の新聞さえもよく売れた。さらに新聞各社へはひっきりなしに集会の様子の問い合わせ、政府を批判する読者からの電話が相次いでいた。今や新聞は政府の敵となった。敵対的な姿勢を明確にするほど売れた。政府の卑劣で暴虐な行為を暴き立てるほど、集会参加者の規模を50万人、100万人と誇張気味に報じるほど、集会への参加者は増えた。チャムローン自身も5月9日朝にハンストを中止するとき、「新聞に大いに感謝しています。記事にして報道してもらうことを切に希望しています。さもないと、人々はあまりやってこないでしょう」と記者に語っている [Matichon, May 10, 1992]。放送メディアへの規制は新聞の需要を高め、その新聞は首相への怒りを増幅させ、集会への参加を増やしていたのである。

政府は5月18日に非常事態を宣言した後、活字メディアの規制に乗り出したものの、ほとんどの新聞はこれに応じず、引き続き集会の様子を報道し続けた。放送メディアが「大本営発表」機関と化すと、少なくとも首都住民は、もはや放送メディアをまったく信用せず、情報をもっぱら新聞に頼った。新聞は必ずしも真実を報道していたわけではない。集会が拡大すると、記者たちも全貌を十分には把握できなくなったからである。事実関係に関する報道内容にも各紙ごとにかかりの食い違いが見られた。しかしながら、放送メディアよりは遙かに信用された。各紙がどこそこで何体の遺体が目撃された、兵士が遺体をいずこかへ運び去ったと報じれば、多くのものは信じた。ましてや、5月19日0時55分にローヤル・ホテルから出てきた元下院議員（96年に都知事）ピチットによれば、ホテルのロビーには100体ほどの遺体があった、という具合に著名人の証言を報じれば [Matichon, May 19, 1992]、信用度は高まった。そこで重要なのは犠牲者の実数ではない。事件の渦中では誰も実数を把握してなどいなかった。読者が、多数の死者が出ていると信じることが重要であった。

報道の規制に加えて、政府側は手を尽くして集会を妨害しようとしていた。5月17日の集会で移動トイレ車を使わせなかったのはその一例である。集会主催者は、目と耳をふさいだうえに尻までふさぐと揶揄した。同日同じ時間帯に無料コンサートを開いたのも同様な妨害であった。人々の怒りをかきたてたのは妨害工作ばかりではない。与党が憲法改正に合意しながら、11日に集会が解散されるや、態度を翻したことも批判的であった。首相をはじめとする政府や軍の首脳の発言も同様であった。首相は5月7日の国会演説以来挑発的な発言を繰り返していた。閣僚でも、たとえば農業副大臣は5月9日に記者に、集会参加者はサンティ・アソーク信者と日当300バーツで雇われたスラム住民であると語った [Matichon, May 19, 1992]。こうした妨害や暴言はことごとく首相が悪人であり辞任すべきであるという確信を強めさせるばかりであった。

政府が妨害を試みるほど、善悪対立の図式が鮮明になっていった。もともとチャムローンには戒律遵守や言行一致により正義（ダルマ, *dharma*）の味方というイメージがあった。首相の言

行はチャムローンをさらに美化していった。5月9日にハンストを中止しても、それを格別批判するものはなかった。逆に、就任当初から批判を受けていた首相は妨害を試みようとして策を弄するほど、信用を失い悪玉イメージを強めていった。首相が灰色から真っ黒になるにつれて、白黒の対比が鮮やかになっていった。敵は悪の権化、味方は善の体現者という虚構の現実味が増していったのである [川上 2000: 125]。民主主義にもまして正義のための戦いという単純明快な図式が明瞭に浮かび上がったことは、集会への参加者を増やす大きな要因となった。善悪対立の構図をチャムローンほど明確に投影しうる人物はいなかった。彼は5月の集会において不可欠の重要な役割を担っていたのである。

4. なぜ乗っ取りが起きたのか

チャムローンは5月の集会の主役であったはずである。ところが、事件をめぐる言説の中では彼はじきに主役の座から滑り落ちることになる。中間層が主役であったという説明が定着するからである。これはなぜであろうか。3つの大きな要因があったように思われる。1つ目は国王の仲裁、2つ目は流血への批判、3つ目はマス・メディアである。

4.1 国王による事態収拾

政府側が軍隊を投入して断固たる鎮圧の決意を示したときには、集会側はもはや国王に頼るしかなかった。最初の流血の夜が明けた18日朝早速チャムローンは国王警護部隊長 (samuharatchaongkharak) の娘や枢密顧問官のプレーム元首相と電話連絡をとった [Matichon, May 19, 1992]。プレームには「適切な処置をお願いいたします」と依頼した [KT, May 19, 1992]。チャムローンばかりではない。ほとんどのものが悲嘆と無力感を募らせて、国王の介入を待ち望んだ。²⁶⁾

国王へのこうした甘えは、国王の権威へ絶対的信服に起因している。現国王は1960年代から着実に権威を強化し、73年には軍事政権首脳に退陣を命じ、80年代には揺るぎない地位を確立していた。国王は首相を成敗しうるはずである、多くのものはこう信じていた。しかしながら、5月事件では18日以降渴望されていたにもかかわらず、国王はすぐには動かなかった。推測の域を出ないものの、2つの可能性を考えうる。1つは動けなかった可能性である。国王が行動を起こすには舞台裏での工作が必要である。不首尾な介入は断じてあってはならない。十分なお膳立てが整ってやっと荘重に登場しうるのである。そうした舞台準備がなかなか整わなかった

26) 18日17時には首相が3軍の総司令官とともに国王に拝謁し、状況を説明している [Thai Rat, May 20, 1992]。

18日23時半、BBCがプレームが国王に拝謁していると報道しているが、事実かどうかという問い合わせの電話が新聞社に入った [KT, May 19, 1992]。19日4時45分にプレームが国王に拝謁したという情報があると報じられている [KT, May 20, 1992]。

という可能性である。²⁷⁾ もう1つは抗議集会に共感を抱いていなかった可能性である。

国王が事態收拾に乗り出すのは20日夜のことである。20日にはそれを予感させる動きが生まれ始めていた。テレビは午前6時に、フランス滞在中のシリントーン王女のインタビューを放送した。「もっとも願ってやまないのは、殺戮を繰り返しているものが暴力を止めることです。タイ人同士なのですから、意見が異なっても…よく話し合って他の方法で問題を解決して欲しい」と語った。これは5月7日以後では初めて政府を批判する内容の放送であった [SKT 1992: 9]。同日20時には韓国訪問中の皇太子のインタビューが放送された。主旨は皆が協力し合って問題を解決すべきということであった [SKT 1992: 8]。テレビのうち放送公社と広報局の2局は17日から18日にかけての衝突の様子を初めて詳しく報道した。軍隊による過度の鎮圧の場面も報道された。さらに19時半には留置場のチャムローンの様子も報道された。完璧な放送メディア統制が揺らぎ始めたのである。もっと重要なことに、20日9時から11時45分にかけて、枢密顧問官たちがブレームの公邸に集まって会議を開いていた。そこではスチンダーの解任を国王に上奏することが決められたと伝えられている [KT, May 21, 1992]。開催場所が宮殿ではなかったので、記者たちに察知されるのを見越していたものと思われる。²⁸⁾

同日21時30分から国王はスチンダーとチャムローンを招いて、枢密院議長とブレームが同席する前で、流血に至ったことを叱責し、対立を止めて話し合いで問題を解決するように促した [SKT 1992: 7]。この様子は21日0時からテレビで放送された。これは多くのものが期待していた悪玉スチンダーの即時解任ではなく、双方を等しく戒める喧嘩両成敗であった。取りあえず暴力には終止符が打たれたものの、集会側には不満が残る内容であった。翌朝の各紙が一面の大見出しで国王の英断を称える中、プーチャットカーン紙のみが「夢破れる、スチンダーが首相続投」という見出しをつけたのはこうした不満を代弁している。²⁹⁾ ここでもし国王がチャムローンに荷担し、首相のみを処断する決定を下していれば、チャムローンは英雄として留置場から凱旋できたであろう。そうはならなかったことが、後にチャムローン批判を生み出す伏線となるのである。

4.2 流血への批判

事件後、流血の責任を問おうとする動きが出てきた。大方のものは軍に矛先を向けた。しかし、チャムローンを非難するものもいた。「チャムローンは人々を死に導いた」という軍支持勢力からの攻撃はその典型である。こうした敵対勢力ばかりではなく、それまで集会に好意的

27) 軍を納得させる必要があった。

28) 枢密院議長（顧問団長）のサンヤーは後日、5月19日16時から顧問官たちがブレームの公邸で会議を開き、ブレームに事態收拾を委ねることに決したものの、国王が自ら收拾に乗り出すことになった、と語っている [Surin 1992: 33]。この会議については、92年5月当時の新聞からは確認しえなかった。

29) それゆえ、これ以後も多くのものは鬱々とした日々を過ごすことになる。誰もが快哉を叫ぶのは、勅選によりアーナンが後継首相に任命される6月10日を待たねばならない [Murray 1996: 187]。

であった新聞からも批判の声があがった。5月19日付けの英字紙ネーションは「[王宮前広場からの集会の] 移動は…衝突を狙っていた。…拙速な行動は悲劇を招来しうる。…暴力は多くのものを抗議集会から離反させることになった」と論評している [The Nation, May 19, 1992].

彼はなぜ集会を移動させたのであろうか。

もとをただせば、チャムローン決起の目的は首相退陣にあった。まず集会に多数の人々を集めようとした。これは規模の大きな集会や動員の伝統がないタイではたやすいことではない。ハンスト戦術を用い、集まった人々を帰さぬよう工夫を凝らしたのはそれゆえにほかならない。それでも目的を達成しえなければ、ほかの方法により圧力をもっと強める必要がある。その手段の1つがデモ行進であった。チャムローン自身が5月9日6時すぎに、なぜ8日に王宮前広場を出たのかという記者の質問に筆談で、「移動したのは、ずっと王宮前広場にいと、人々が興味を失ってしまうからだ。1日中演説を聞いていると疲れてしまう。歩くことによって、示威行動をしなければならない。さもないと、闘争は前進しない。第2に、明日5月10日には、政府が王宮前広場で始耕祭 (phutmongkhon) を予定している。第3に、5月7日に試してみても整然としているのを目にしていたので、人々の移動に自信があったからだ」と答えている [Matichon, May 10, 1992]. 参加者の士気を高めるという判断もあったわけである。

ハンストを宣言し、5月6日の集会に結集して欲しいと強く呼びかけていたチャムローンは当初から短期決戦を予定していた。ハンスト中のチャムローンには悠長に構えている余裕はなかった。膠着状態が何日も続けば、チャムローンは苦境に追い込まれる。また、こうした行進は規模が大きいほど圧力手段として有効である。それゆえ、早速5月7日に集会参加者が増える時間帯を見計らって移動が行われた。王宮前広場に移って集会の規模が前夜よりもさらに膨らむと翌8日21時前にも移動を始めた。こうした圧力を受けて、下院議長が奔走し、憲法改正をめぐる動きに少し前進が見られたものの、首相は強硬な姿勢を崩さなかった。

移動には示威行進以上の効果も期待された。8日の移動に際しては、警察が移動を阻止せず、通行を認めるならば、政府官邸、首相公邸、チトラダー宮殿といった場所へ向かいえた。73年10月のように宮殿にたどり着ければ、国王に首相解任を訴え出ることもできた。³⁰⁾ 同日の移動では参加者に行き先が明言されていなかったという事実は、宮殿へ向かおうとしていた可能性を強く示唆していよう。他方、警察が移動を阻止すれば、御幸通りは通行不能となる。常日頃

30) ある新聞は、チトラダー宮殿に向かい、国王に首相解任を求めることが目的であったと述べている [Phucatkan, May 9-10, 1992]. 別の新聞はさらに詳しく報じている [Matichon, May 10, 1992]. チャムローンは8日には集会への参加者が増えることを予想していた。彼はこの機会をとらえて、首相への圧力を強めるべきであると判断し、集会の移動を始めた。チトラダー宮殿に着いたら、準備しておいた10万本のローソクを参加者に配布して灯りをともし、国王賛歌を合唱しつつ、首相解任を国王に訴えるという予定を立てていた。政府側も、チャムローンが8日に攻勢に出てくると予想しており、3重の関門を準備していた。

から悪名高いバンコクの渋滞はますます深刻なものとなる。渋滞への怒りが政府に向けられるならば、首相への圧力を高められる。

5月17日の移動の際には、政府官邸に赴いて首相に直接圧力をかけると参加者に説明されていたものの、当時首相は北部地方を視察中であり、圧力の効果は疑わしかった。首相が5月18日の声明で指摘したように、政府が集会の移動を阻止することも自明であった。政府官邸や宮殿へ通じる道路には警察と軍が幾重にも関門を設置していた。行く手を阻まれ路上集会を開いたところで、圧力としては不十分であり、首相が退陣に応じないことも確認済みであった。

大規模集会、デモ行進、路上集会に続く次の一手は流血であった。日刊紙デイリー・ニュースは、5月17日夕方の民主連盟の会合で次の決定が行われたという情報があると報じている。今後は数十万規模の人間を集めることは難しくなるので、今日で決着をつける必要がある。政府側の武力行使を誘発すべく、王宮前広場から移動させることを決めた、というのである [Daily News, May 18, 1992].³¹⁾ 路上での集会を8日から開いたにもかかわらず、首相が退陣に応じなかったため、今度は流血事件へと発展させようとしていたと解釈するのが自然であろう [Khien 1997: 39].

流血に至った場合には、非難の声が沸き起こる。犠牲を最小限にとどめるべきことはいうまでもない。肝心なのはその責めを首相に負わせることである。そのためには、集会側は暴徒の誹りを免れねばならない。政府側が平和な集会に一方的に暴力を行使したという雰囲気醸し出し、その正当性を失わせなければならない。そうなれば、批判はもっぱら首相に向けられる。実際のところ、暴虐きわまりない鎮圧が映像とともに世界中に報じられると、首相は国際社会から厳しい批判を浴びることになった。内外からの批判が高まっても首相がなお居座りを決め込んだ場合には、国王の慈悲にすがることになる。

政府側も発砲が批判を招くことを予想していたはずである。5月17日深夜には発砲に先立って暴力事件が起きていた。警察施設襲撃事件が集会主催者側工作員、政府側工作員、あるいは愉快犯的第三者のいずれの仕業なのかは迷宮入りである。しかしながら、軍隊投入の契機となったナーンルーン警察署襲撃事件では、警察官は現地対策本部となっていた同署を放棄して撤退している。すぐ目と鼻の先には5000名の軍隊が重装備で待機していたにもかかわらず [Naeona, May 18, 1992], 1000名ほどの暴徒による略奪、破壊、放火を阻止する行動はとられなかった [KT, May 19, 1992]. 18日夜から19日朝にかけての御幸通りでも政府施設の略奪や放火を間近の軍隊が看過していたと報道されている [Daily News, May 20, 1992]. 政府側は意図的に取締を放棄していたといえよう。

31) 「16日の夜、プラティープに明日の集会の予定はと聞くと、絶対に他人には漏らさないという約束で集会後のデモ行進のことを聞かされた」というプラティープの夫君の証言 [秦 1993: 185] は、デモ行進が前日にはすでに予定済みであったことを示している。

多数の死傷者が出た責任の一端はチャムローンにある。王宮前広場で集会を続けていれば、軍隊の発砲はなかった。しかし、それでは首相の退陣はありえなかった。流血と首相退陣は不可分であった。5月事件を民主化運動の勝利と評価する勢力には、反省する資格はあっても、移動を批判する資格はなかろう。流血への批判は首相退陣に至らなくてもよかった、つまり大規模集会で氣勢を上げれば十分であった、というに等しいからである。それにもかかわらず、この歴然たる事実を軽視して、事件後には民主化運動を称える勢力の中から、チャムローンを批判する声が出てきた。

4.3 中間層主導説

集会に誰が集まったのか、彼らがなぜ集まったのか、この2つは別問題である。チャムローン自身は5月25日に在米タイ人との電話インタビューでこう語った。「数多くの県からやってきたものが集会に参加しており、いろんな職業のものがいた。従来のように学生・教師のみ、労働者のみといった特定の集団だけではなかった。信じがたいことにあらゆる集団の人々が参加していた。…格別何もしなくても快適に暮らせる中間層も我慢できなくなって参加していた」[Matichon, May 31, 1992]。チャムローンよりもNGOが主導的な役割を果たしたとする立場を採用する研究者の多くも、あらゆる階層の人々が集まっていたと主張している。主催者側に着目すると、誰が参加したのかは二義的な問題にすぎず、特定の階層を強調する意味はない。この点は、集会を動員されたもの、組織されたものであると批判した政府側にも共通している。

にもかかわらず、活字メディアや研究者の関心は誰が集まったのかという点に集中してゆく。集会が始まった直後から、参加者には中間層³²⁾が多いと指摘するものが少なくなかった。英字紙ネーションは早くも5月7日に「ヤッピーの群衆」と報じていた[Callahan 1998: 46]。5月8日の参加者については、多くのものは携帯電話³³⁾を持参し、服装もきちんとしているので中間層である、中には自家用車で駆けつけているものもいる[Thai Rat, May 9, 1992; Ban Muang, May 9, 1992]と報じられていた。大半のタイ人は政治に関心がなく、抗議集会に参加しているのは過去数年間の経済成長で規模が大きくなった中間層である、というAP通信を引

32) タイの場合、中間層かどうかは、職業、所得水準、学歴、生活スタイルなどを基準として判断されることが多く、どの規準を用いるかによって該当者の範囲は異なってくる。現実には本人の意識の問題であり、分かりやすく単純化すれば庶民でも上層でもないと思っているものである。規模が拡大してきたとはいえ、社会全体から見ればおそらく2割を超えることはなく、首都を中心とする都市部に居住する少数派の裕福層である。政治に対する態度は決して一様ではない。タイの中間層をめぐる議論については、浅見[1998]やオッキー[Ockey 1999]を参照されたい。なお、中間層の政治的態度は、社会構造に占める彼らの位置や政治状況に左右されることが知られており[ハンチントン 1995: 66-67; Rueschmeyer et al. 1992: 272-273, 282]、東・東南アジアの中間層はおしなべて保守的であるという分析もある[Jones 1997: chapter 3]。タイの場合にも、中間層が民主主義志向であると決めてかかるのは禁物である。

33) 当時は携帯電話が普及し始めた時期であり、価格も高く所有者はまだ少なかった。

用する新聞もあった [Matichon, May 10, 1992].³⁴⁾ 5月17日の集会についても、参加者は「大半が中間層や実業家」あるいは「学識や生活水準の高い人々」と観察されていた [Khao Sot, May 18, 1992; Naeona, May 18, 1992].

一段と詳しく分析風の説明を行ってみせたのは経済週刊誌クルンテープ・トゥラキットである。同誌は「歴史的意義のある集会」と表紙に大書して第1ラウンドの集会に関する13頁にわたる特集記事を組み、集会参加者の3割余りが携帯電話を持参しており、中間層であったと指摘する。その特色として、時間に規則正しい（夕方にやってきて深夜から朝にかけて帰り、夕方にまた戻ってくる）、身だしなみがきちんとしている、規律が保たれている、演説者を批判する知性がある、自家用車で駆けつけるものがある、といった点をあげる。さらに、こうした「主役の中間層」を、①政治や社会に関心を抱き、生活水準の高い企業人、自営業者、企業家といった中間層、②集会の裏方としても活躍しているサンティ・アソークの信者、③都知事時代からチャムローンを個人的に支持してきた首都の中間層、④73年10月政変を契機としてNGOなど社会活動に積極的に関わってきた高学歴の人々（地方から駆けつけてきたものも含まれる）、と4つに分類している [KTS, May 16-22, 1992, 23]。この記事は、多様な参加者を中間層という1つの範疇に強引に押し込め、その中間層を前面に押し出しているところが重要である。

こうした印象論にある種の科学的権威を与えたのは、事件の渦中の5月19日に経済紙プーチャットカーンに掲載された記事であった。タイ社会科学協会が5月17日夕方の集会現場で2000通ほどの調査票を配布して調べた結果を報じるものであった。ほかの新聞では報じられず、同紙の独占スクープであった。「集会参加者調査では民間企業従業員が50%」という見出しとともに一面に色刷りで鮮やかに示された記事によると、調査は「集会参加者の少なからぬ部分が中間層であるといわれているので、その真偽を確認すること」を目的として行われたものであった。学歴は大卒が52.0%、修士以上が14.5%であり、大卒以上が3分の2を占めていた。年齢は20歳未満2.0%、20歳代39.4%、30歳代36.5%、40歳代14.2%、50歳以上6.7%と、20歳代や30歳代の若年層が圧倒的多数を占めていた。職業は、学生は8.4%にとどまり、公務員が14.8%、国営企業職員が6.2%、会社員が45.7%、自営業13.7%であった。所得（月収）は5000バーツ未満が14.1%、5000～1万バーツが28.5%、1万～2万バーツが30.0%、2万～5万バーツが15.5%、5万バーツ以上が6.2%といったものであった [Phucatkan, May 19, 1992].³⁵⁾ 予想通り中間層中心の集会であるというわけである。

34) タイ発のニュースを外国のメディアから逆輸入することはよく行われている。逆輸入版のほうが影響が大きいからである [McCargo 1999: 554]。集会中のチャムローンも国内のメディアよりも外国のメディアとのインタビューを優先していた。

35) 大卒国家公務員の初任給は92年4月に初めて5000バーツを超えたばかりであった。

筆者はこの調査の正確さについて大いに疑問を禁じえない。確かに大学生主体の73年10月と比較すれば、参加者の顔ぶれはすっかり様変わりしていた。学生が少ないのは、学生運動が80年代にはすでにすっかり低調になっており、しかも5月は学年末と暑季を兼ねた長期休み中でもあったからである。中間層は広義の職業分類で見れば就業人口の2割を越えており、³⁶⁾ 首都ではその割合がさらに高まるので、参加者に中間層が多数含まれていたとしてもまったく不思議ではない。中間層のみが参加しなかったとすればむしろ奇妙である。3割程度であれば十分に可能性がある。しかしながら、半分以上ということになると甚だ疑問である。たとえば90年には首都の大卒人口は92万人であった。プーチャットカーン紙が主張するように17日の参加者が50万人であり、うち3分の2が大卒者とすれば35万人近くとなり、大卒者の3分の1以上が参加したことになる。大卒者には士官学校の卒業生、中高年、保守的な人々も含まれており、それはまずあり得ないことである。また、後に明らかとなった44名の死者についてみれば、85%は独身者、86%は高卒以下、80%は30歳未満であり [Khanakammakan Yat Wirachon n.d.: 118; Ockey 1999: 244]、安定した生活を営む中間層というイメージからはほど遠い。事件後に多種類発売されたビデオテープを見ても、中間層が決して多数派ではないことを確認する。実のところは、参加者はあらゆる職業や階層にわたっていたものの、中間層が服装や所持品のゆえに目立っていたにすぎないのであろう [Thai Rat, May 11, 1992]。

それにもかかわらず、社会科学協会による調査が集会参加者についての唯一の調査、しかも学術風調査であったため、中間層多数説は否定しがたいものとなった。その際に、中間層多数説を積極的に報じたのが、クルンテープ・トゥラキットとプーチャットカーンというタイを代表する経済紙（誌）という点が意味深長であろう。とりわけプーチャットカーン社は事件直後に5月事件を特集した本を出版し、後書きにこう記している。事件は「歴史に残る中間層の運動」であった。「中間層が目覚めて政治運動に様々な形で参加し、完全な民主政治体制へと向かう曲がり角の入り口までたどり着かせたことは」「中間層の成功」である [Phucatkan 1992: 176]。ここでは、中間層による民主化運動と断定されているわけである。

これらの経済紙を中心とする「高級紙」³⁷⁾ の読者はもっぱら中間層である。中間層を民主化運動の主役に祭り上げる報道を行えば、読者が喜ぶことは間違いない。しかも中間層と総称すれば、集会と無関係なものも一括して賞賛の対象となる。これは間違いなく売り上げの増加にもつながる。実際のところ、5月事件以後活字メディアは活況を呈した。6月に週刊クルンテー

36) 職業分類で、専門職・技術職、行政職・管理職、事務職に販売従事も加えた数字である [Giriling 1996: 43]。なお、数値は末廣 [1998] による。

37) 経済誌のほか、英字紙やマティションなども含まれる。こうした新聞はどこでも堂々と読める。他方、中間層が人前で読むことに多少の恥じらいを感じるタイ・ラットやデイリー・ニュースなどは大衆紙である。

プ・トゥラキットは週刊ネーションへ名前を変更して総合週刊誌に衣替えをした。³⁸⁾ 英字紙バンコク・ポストは8月にタイ語の姉妹紙サヤーム・ポストを創刊した。日刊紙やいろんな週刊誌を出版していたワッタチャックは5月に政治週刊誌を創刊した。5月には新しい政治週刊誌カーオ・タイが創刊された。経済紙プラチャーチャート・トゥラキットは付録として政治版をつけるようになった。このように出版活動が活発になったのは、政治ニュースへの需要が高まったからである。事件後に出版が活発になったことは、中間層を主体とする読者が、事件前からではなく事件後に政治への関心を高めたことを示唆している。

活字メディアが書き立てる中間層多数説の影響を受けて、研究者も中間層研究に関心を向けるようになった。それまでタイでは中間層に関する研究はほとんど行われていなかった。中間層が顕著な政治的役割を果たしたことは1度もなかったからである。しかし、92年11月には「タイの中間層と民主化」と題するセミナーが、チュラーロンコーン大学で開催された。その成果は93年5月に1冊の本にまとめて出版された [Sangsit and Phasuk 1993]。このセミナーと出版物は中間層研究に刺激を与え、研究者の間に中間層主導説を定着させるのに少なからぬ貢献をすることになる。

参加者には中間層が多かったという説明は、中間層だから参加したという方向へ飛躍を始める。中間層多数説が中間層主導説へと転換するのである。中間層はかねてから民主政治を希求しており、92年5月にも多くのものが自発的に集会に参加したという説明である。中間層は73年政変の主役となった学生につながる「10月14日世代」なので、終始一貫して民主的であると主張するものがある [Thirayut 1994]。これは強引にすぎよう。中間層は、ごく一部のものを除いて、政治運動には参加してこなかったからである。中間層が民主的であるという証拠になりそうなものは唯一92年5月事件しかないのである。突然眠りから覚めたと言いかいようがない。³⁹⁾ それはチャムローンに促されての参加にすぎなかった。せいぜいのところ、彼らはチャムローンの動員に反発しなかったというにとどまる。真の自発的参加者は、チャムローンが逮捕された18日夕方以降の参加者、ネーション紙 [The Nation, May 19, 1992] がいう「多くのもの」つまり中間層が離脱した後の参加者であった。それにもかかわらず、民主的な中間層が動員されてではなく、自発的に参加したという中間層主導説が定着することになった。こうなると、チャムローンを含めた指導者や指導団体が意味を失うのは時間の問題であった。

38) 英字紙ネーションはタイ語姉妹紙としてクルンテープ・トゥラキットという経済紙ならびにその週刊誌を発行していた。週刊誌が英字紙と同じ名称に変更したのである。

39) アネークは、眠っていたわけではなく、理想の民主政治を見出せないままに、民主政治期には民主政治を批判してクーデターのお膳立てをし、軍政期には軍政を批判してきたと述べる [Anek 1993: 63]。確かなのは、必ずしも民主的ではないということである。

5. 民主化への影響

92年5月事件や中間層主導説はその後のタイ政治の民主化にどのような影響を与えたのであろうか。大きな影響として2点を指摘しうるであろう。1つはチャムローンの失墜である。もう1つは中間層を中心に据えた政治改革論の台頭である。

5.1 チャムローンの失墜

チャムローンは事件後犠牲者が出たことに遺憾の意を表明しつつも、その責任はすべて政府にあると主張していた。92年6月に出版された運動回顧録は自信に満ちあふれている〔チャムロン 1993〕。彼は今後クーデタが起きても人波で対抗しうると語って、動員戦術に自信を示してもいた。

独立運動を経験しなかったタイでは、大衆動員型の政治はほとんど例がない。政治集会といえば、もっぱら学生、労働者、農民によるものに限られてきた。規模も小さく、10万人を超えることはまずなかった。こうした伝統に反して、チャムローンは議会政治家としては初めて人数無制限の動員を行った。大群衆を動員する政治は危険きわまりない。流血に至り犠牲者が出るというだけにはとどまらない。統制困難となり、要求が急進化する危険性を秘めているからである。王室に牙をむく可能性すらある。民主政治との関連では、スチンダーが批判したように、国会で野党になったら院外での大衆動員に訴えるというのでは、議会政治の安定は難しい。必要とあれば、議会政治だけではなく、街頭政治にも積極的に訴えようというチャムローンの失墜は危険分子の排除であり、後に続こうとするものにとっても教訓となった。伝統を破った大衆動員は再び禁じ手となったのである。それゆえ彼の失墜は、議会中心の安定した民主政治の定着に大いに寄与したといえよう。

チャムローンの失墜は流血への批判と密接に絡み合っていた。5月事件後、6月に国会が解散され、9月に総選挙が予定された。この選挙戦ではマス・メディアはスチンダー政権時代の与党を「悪魔党」、野党4党を「天使党」と二分し、天使党に声援を送った。5月事件では、野党陣営ではチャムローンのパランタム党がもっとも目立ち、チャワリットの新希望党もそれを支援していた。これに対して、民主党の役割は目立たなかった。同党下院議員の中にも集会に参加して演説を行うものはいたものの、たとえば逮捕や出国禁止の対象となった政党政治家はパランタム党、新希望党、エーカパーブ党の3党のみであり、民主党議員にはいなかった。これは同党の役割が小さかったからである。ところが、すべて天使党と一括されると、民主化運動への貢献度は平準化されてしまう。

その民主党は80年代以後南部地方に安定した地盤を持ち、首都での勝敗に盛衰を左右されてきた。もっぱら首都のみを基盤とするパランタム党とは激しく競り合う関係にある。民主党は92年3月の総選挙では惨敗を喫していたため、9月には首都議席の回復を狙ってチャムローン

を批判する戦術を採用した。選挙運動では「議会政治を堅持する」や同党党首「チュワンを選べば涙を流さなくてすむ」といったスローガンを掲げた。いずれもチャムローンの過激さと民主党の穏健さを強調するものであった。民主党のこの運動は、「チャムローンは人々を死に導いた」という軍支持勢力のキャンペーンと軌を一にしていた。

それと並んで、権力を失った勢力が巻き返しのためにテロ事件を頻発させ不穏な状況を醸成した73年10月政変後を想起させるような事態が生まれてきた [BPWR, September 4, 1992]。軍とつながる右翼団体がチャムローン、チャワリット、民主連盟を批判する運動を続けており、7月22日に王宮前広場で1000名ほどの集会を開いて氣勢を上げていた [Khao Thai, July 27, 1992]。さらに爆破事件がいくつか起きた。まず5月30日には与党間の足並みの乱れから社会行動党本部で爆破事件が起きた [MS, June 5, 1992]。8月13日には南部ハートヤイの鉄道駅で爆破事件が起き、死者3名負傷者74名を出す惨事となった [MS, August 28, 1992]。8月18日にはワッタチャック紙の編集長の自動車が壊され、2日後にはテレビの討論番組司会者の自宅に火炎瓶が投げ込まれた [MS, August 28, 1992]。また、政府の5月事件真相究明委員会の委員になっていた医大学長が自宅へ何度も脅迫電話を受けて6月23日に委員を辞任した [Matichon, June 24, 1992]。チャムローンは脅迫をずっと受けており、民間の警備会社に警備を依頼していた。人々はこうした事態に治安への不安を感じ、秩序を求めて次第に保守化していった。

さらに、英字紙ネーションにいたっては、投票日の前日に一面最上段で、民主党党首の「チュワンが唯一の申し分のない首相候補である」と謳い、「今は政治的異端者や『民主主義の英雄』の時機ではなく、チュワンが首相になれば、タイは議院内閣制への信頼を回復し、民主的な世界に顔向けができる」と主張して民主党への投票を呼びかけていた [The Nation, September 12, 1992]。親軍政党と民主党からの強い批判を受けて、パランタム党は首都での議席を32から23へ減らした。これに対して、天使党の衣をまわしてもらった穏健な民主党は首都での議席を1から9へと増やしたことに助けられて第1党になり、党首が首相に就任することになった。⁴⁰⁾ チャムローンは実質的には敗北を喫したのであり、これ以後政界では転落を重ねることになる。

5.2 政治改革論

中間層主導説は中間層を民主化の担い手と称揚し、中間層を傲慢にしてゆくことになる。中間層には、元来、都市下層民や農村部住民といった庶民 (chaoban) を見下すものが多い。5月18日午前中にパーンファー橋に赴いた地方出身の学生はこう記している。当時は小康状態にあり、集会参加者の中には警備の兵士に語りかけたり、食べ物を差し入れたりするものがいた。兵士たちは首都近県の出身者たちであった。集会参加者の中には「田舎ものは無知なので、

40) 新希望党幹部は選挙後、パランタム党は実質に敗北を喫したのであり、「タイ人は独裁を嫌うくせに、独裁と戦う政党も嫌っている、よく分からないが、何もしない人物を望んでいるということなのかな」と語っている [MS, September 25, 1992]。

話し相手にならない、と兵士をひどく侮蔑するものがいた。民主主義の意味を知っているかい、と兵士に真顔で問いかけるものもいた。もし自分が田舎もので初めて首都にやってくる、首都住民が田舎ものよりもずっとよい暮らしをしており、若者達が高価で見栄えのする服を着用しており、旦那衆が携帯電話を持ち、ベンツやBMWといった高級車を乗り回しているのを目にしたうえに、しかも無知蒙昧な連中と蔑視されたら、腹を立てて当然だろう」[*Sayam Rat Sapdaucan*, July 19-26, 1992]. 無知で貧しく粗野な庶民から一線を画したい大方の中間層にとって、中間層主導説はまことに心地よいものであった。92年5月の民主化運動の主役に持ち上げられることで、庶民とは違うことを証明してもらえたからである。

中間層主導説は集会参加者の大半が中間層であったと主張してきた。これは中間層以外の参加者、とりわけ犠牲者となった下層の人々を民主的勢力から排除するに等しい[Callahan 1998: 72]. 92年5月の集会を裏方として支えたスラム地区住民やサンティ・アソーク信者といった人々は民主化への寄与をまったく否定されてしまっている。中間層主導説はチャムローンから主役の座を奪ったばかりではなく、中間層以外の参加者にもエキストラ程度の役割しか認めないのである。

それに加えて、中間層のみが自発的主体的に参加したという主張は、それ以外の人々にはそうした自発性主体性がないという捉え方につながってゆく。人口の7割以上を占める庶民は、政治家、行政、知識人などにより動員（radomあるいはken）され組織（cattang）されないと政治行動を起こせず、そうした受動的な運動には正当性がないと断罪されてしまうのである[Callahan 1998: 71]. マス・メディアによるこうした主観的な二分法について、すでに92年5月にスチンダーは、17日の集会には宗派や政党に雇われたり動員されたりしたものが多数参加するにもかかわらず、どうして新聞は「私を支持するものを動員されている、私に反対するものを自発的に集まっていると見なすのか」[*Khao Sot*, May 18, 1992]と不満を露わにしていた。規模では92年5月にはるかに劣るものの、92年以後首都では集会が何度か開かれている。参加者はたいていが労働者か地方からやってきた農民である。これらの集会は組織された集会と批判を浴びることになった。さらに、誰からいくらの日当をもらってきたのかという詮索が行われることが少なくなかった。他方において、97年の通貨危機の後にビジネス街で抗議デモが開かれると、組織されない自発的な運動と賞賛された。日当や手当を支給して動員する場合や権力関係を利用して強制的に動員する場合はさておき、およそ規律の保たれた一定規模の集会やデモには指導者や組織者が不可欠であり、参加者は自らの生活や利害をかけて運動に加わるのである。この明白な事実を等閑に付して、庶民の運動を批判するのはまったく失当である。

マス・メディアと中間層の間には相互関係がある。メディアは中間層を民主化の担い手と褒めそやすことにより、中間層を自惚れさせた。過剰な自信をつけた中間層の主張や意見はメディアを通じて表現される。メディアはその代弁者として自らの発言力や主張を強めてゆくことに

なる。⁴¹⁾ メディアが中間層を強化し、それによって自らも強化されるというお手盛りなのである。そこでは、あらゆる読者や視聴者に配慮した報道から、中間層に迎合的な報道への傾斜が見られるようになる。一例を挙げよう。通貨危機を招いた責任を問われ批判を浴びるチャワリット首相のもとへ97年9月16日に民主連盟のプラティープとサンがスラム地区住民代表とともに激励に訪れた。プラティープによれば、「最近の7つ8つの政権の中で、この政権が貧民にもっとも恩恵をもたらしてくれた」からであった。しかし、マティション紙のコラムは、プラティープが「理想を捨てた」と、プーチャットカーン紙のコラムは「スラム住民が…墓場へ死霊（退陣瀬戸際の首相を指す）を激励に訪れた…変じゃないか」と厳しく批判した[Athit, September 26, 1997]。中間層が顧客として十分に大きな規模に成長してきたことがその背景をなしている。

中間層は人数では依然として少数派であるにもかかわらず、メディアを通じて彼らの意見が世論となって政治論議を支配するようになってゆく。「都市部住民は『声は大きい』ものの『票数は少ない』のに対して、農村部住民は『声は小さい』ものの『票数は多い』」[KPP 1995: 61]という状況が生まれるのである。中間層が「5月事件の真の勝利者」[Girling 1996: 20]と見なされるようになったことの意義はここにある。少数派であるがゆえに、中間層を中心に据えつつ、そこに知識人、実業家、NGOなどを都合よく加え、同時にいつも庶民を排除して、「市民社会 (prachasangkhom)」「公衆 (satharanachon)」「市民 (phonlamuang)」といった名前を冠することにより、メディアで表現される意見には世論の体裁が取り繕われた。その結果が、農村部選出議員主導の議会政治への異議申し立てであり、政治改革論さらに1997年憲法へとつながってゆくことになる。その憲法において、国会議員や閣僚の資格要件として大卒以上の学歴を備えていなければならないという規定が盛り込まれた。大卒者は総人口の5%ほどとごく少数であるにもかかわらず、マス・メディアからはほとんど批判の声が出なかった。⁴²⁾ こうした動きについては稿を改めて論じたい。

引用文献

Amara Pongsapich. 1995. Strengthening the Role of NGO's in Popular Participation. In Jaturong Boonyarattanasoontorn and Gawin Chutima, eds., *Thai NGOs: The Continuing Struggle for Democracy*. Bangkok: Thai NGO Support

41) パースックが、1992年を境として「活字メディアは強くなり大胆になった」[Pasuk 1999: 13]と指摘するのは、この点を指している。

42) 5月事件に密接に関連するエピソードを1つだけ紹介しておきたい。97年憲法に基づく最初の国政選挙となった2000年3月の上院議員選挙において、民主連盟の委員3名がバンコク（定員18名）で立候補した。プラティープのみは40,228票という10位の得票で当選したものの、ウェーンは13,448票の24位、チャラートにいたってはわずか3,405票の108位で落選した。プラティープの得票は1位当選者（421,515票）の10分の1以下、最下位当選者（22,925票）の1.8倍にすぎない。5月事件の記憶が色褪せたからばかりではなく、中間層主導説が風靡したことにも一因があるろう。

- Project, pp.9-50.
- Anek Laothammathat. 1993. *Mop muthu: chonchan klang lae nakthurakit kap phatthanakan prachathipatai*. Bangkok: Matichon.
- 浅見靖仁. 1998. 「中間層の増大と政治意識の変化」田坂敏雄編『アジアの大都市 [1] バンコク』日本評論社, 305-328.
- Callahan, William A. 1998. *Imaging Democracy: Reading "The Events of May" in Thailand*. Singapore: ISEAS.
- _____. 2000. *Pollwatching, Elections and Civil Society in Southeast Asia*. Aldershot: Ashgate.
- チャムロン, スィームアン. 1993. 『タイに民主主義を』北村 元・佐々木咏子訳, サイマル出版会.
- Gawin Chutima. 1995. Thai NGOs and Civil Society. In Jaturong Boonyarattanasoontorn and Gawin Chutima, eds., *Thai NGOs: The Continuing Struggle for Democracy*. Bangkok: Thai NGO Support Project, pp. 135-144.
- Girling, John. 1996. *Interpreting Development: Capitalism, Democracy, and the Middle Class in Thailand*. Ithaca: Cornell University Southeast Asia Program.
- 秦 辰也. 1993. 『バンコクの熱い季節』岩波書店.
- ハンチントン, S. P. 1995. 『第三の波』坪郷 實・中道寿一・藪野祐三訳, 三嶺書房.
- 川上源太郎. 2000. 『ミドル・クラス: 英国にみる知的階級宣言』中央公論社.
- 河森正人. 1997. 『タイ: 変容する民主主義のかたち』アジア経済研究所.
- Khanakammakan Yat Wirachon Phurtsapha 35. n.d. *Ramluk 5 pi phrutsapha pracha tham: Kanchamla prawatisat khong prachachon*. Bangkok: Khletthai.
- Khien Thirawit. 1993. *Wikritkan kanmuang thai: karani phrutsapha mahawippayok B. E. 2535*. Bangkok: Matichon.
- _____. (Khien Theeravit). 1997. *Thailand in Crisis: A Study of the Political Turmoil of May 1992*. Bangkok: Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University.
- KPP (Khanakammakan phatthana prachathipatai). 1995. *Khosanoe krop khwamkhit nai kanpatirup kanmuang thai*. Bangkok: Samnakngan kongthun sanapsanun kanwicai.
- Jones, David Martin. 1997. *Political Development in Pacific Asia*. Cambridge: Polity Press.
- Mahatthai, Krasuang. n.d. *Krasuang mahatthai kap hetkan phrutsapha 35*. Bangkok: Rongphim ongkan songkhro thahan phan suk.
- McCargo, Duncan. 1997. *Chamlong Srimuang and the New Thai Politics*. London: Hurst.
- _____. 1999. The International Media and the Domestic Political Coverage of the Thai Press, *Modern Asian Studies* 33 (3): 551-579.
- Murray, David. 1996. *Angels and Devils: Thai Politics from February 1991 to September 1992 — A Struggle for Democracy?* Bangkok: White Lotus.
- Ockey, Jim. 1999. Creating the Thai Middle Class. In Pinches, Michael, ed., *Culture and Privilege in Capitalist Asia*. London: Routledge, pp. 230-250.
- Pasuk Phongpaichit. 1999. *Civilising the State: State, Civil Society and Politics in Thailand* (The Wertheim Lecture 1999). Amsterdam: Centre for Asian Studies Amsterdam.
- Pasuk Phongpaichit and Chris Baker. 1995. *Thailand: Economy and Politics*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- _____. 1997. Power in Transition: Thailand in the 1990s. In Hewison, Kevin, ed., *Political Change in Thailand: Democracy and Participation*. London: Routledge, pp. 21-41.
- Phucatkan. 1992. *Phrutsapha Thamin*. Bangkok: Phucatkan.
- Prudhisan Jumbala. 1992. *Nation-Building and Democratization in Thailand: A Political History*. Bangkok: Chulalongkorn University Social Research Institute.
- Prudhisan Jumbala and Maneerat Mitprasat. 1997. Non-Governmental Development Organizations: Empowerment and Environment. In Hewison, Kevin, ed., *Political Change in Thailand: Democracy and Participation*. London:

Routledge, pp. 195-216.

RT (Ratthaban Thai, Khanakammakan truat sop kho thetcing). 1992. *Raingan phon truat sop kho thetcing kiokap kankratham khwamphit lae samruat khamsihai nuangnai kanchumnumkan rawang wan thi 17-20 phrutsaphakhom* 2535.

Rueschmeyer, Dietrich, Evelyne Huber Stephens and John D. Stephens. 1992. *Capitalist Development and Democracy*. Cambridge: Polity Press.

Sangsit Phiriyarangsarn and Phasuk Phongphaicit, eds. 1993. *Chonchan klang bon krasae prachathipatai*. Bangkok: Sunsuksa Setthasat Kanmuang.

SKT (Samakhom nak khao haeng prathet thai). 1992. *Banthuk yio khao na somuraphum thanon ratchadamnoen phrutsaphakhom* 2535. Bangkok: Dokbia.

末廣 昭. 1993. 「タイの軍部と民主化運動: 73 年『10 月政変』から 92 年『5 月流血事件』へ」『社会科学研究』44(5): 48-95.

_____. 1998. 「労働力調査」末廣 昭編『タイの統計制度と主要経済・政治データ』アジア経済研究所, 73-100.

Surin Maisirikrod. 1992. *Thailand's Two General Elections in 1992: Democracy Sustained*. Singapore: ISEAS.

Suthy Prasatset. 1995. The Rise of NGOs as Critical Social Movement in Thailand. In Jaturong Boonyarattanasoontorn and Gawin Chutima, eds., *Thai NGOs: The Continuing Struggle for Democracy*. Bangkok: Thai NGO Support Project, pp. 97-134.

玉田芳史. 1992. 「『暴虐の 5 月』事件とチャムローン・シームアンのハンスト宣言」『東南アジア研究』30 (3): 376-377.

Thirayut Bunmi. 1994. *Suan nung khong khwamsongcam 20 pi 14 tula lae pai khang na*. Bangkok: Winyuchon.

新聞・週刊誌

日刊紙

(タイ語) Ban Muang, Daily Mirror, Daily News, Dao Sayam, Khao Sot, Matichon, Naeona, Phucatkan, Sayam Rat, Thai Rat, KT (Krungthep Thurakit), (英語) The Nation, Bangkok Post.

週刊誌

(タイ語) Athit, Khao Thai, KTS (Krungthep Thurakit Sutsapda), MS (Matichon Sutsapda), Sayam Rat Sapdawican, (英語) BPWR (Bangkok Post Weekly Review).